

31. ガス壊疽に対する高圧酸素療法

森山雄吉*¹⁾ 松田範子*¹⁾ 京野昭二*¹⁾
 金 徳栄*¹⁾ 滝沢隆雄*¹⁾ 徳永 昭*¹⁾
 田中宣威*¹⁾ 恩田昌彦*¹⁾ 益子邦洋*²⁾
 辺見 弘*²⁾

(*¹⁾日本医科大学第一外科
 *²⁾ 同 救命救急センター)

ガス壊疽は比較的稀な疾患であるが、ひとたび発症すると重篤なる全身症状を呈し、抗生物質の大量投与、適切なる外科的処置、厳密なる全身管理を行っても死亡率の高い疾患であるといわれている。ところで私どもは第23回の本学会において37例のガス壊疽患者に対して高圧酸素療法での治療経験につき、その概要と治療成績について報告したが、今回その後の症例を加えて検討したので報告する。

症例は50例で、男性33例、女性17例、年齢は16～74歳、平均46.6歳で、交通外傷を含めて、いわゆる外傷に起因したものは35例で、非外傷性のもは15例であった。

その治療成績を見ると、有効と思われた症例は43例、86.0%と好成績が得られており、高圧酸素療法が大変有効であったものと考えられた。

なお最近、糖尿病などの基礎疾患に合併した非外傷性のも、non-dostriidial type のものが増加しているの、その治療についても述べる。

32. 放射線膀胱炎に対する高圧酸素療法の経験

守田敏洋*¹⁾ 高橋健一郎*¹⁾ 木谷泰治*¹⁾
 藤田達士*¹⁾ 渡辺久志*²⁾

(*¹⁾群馬大学医学部麻酔蘇生学教室
 *²⁾ 同 付属病院高気圧酸素治療室)

骨盤部照射による出血性膀胱炎は自然治癒があまり期待できない進行性の疾患である。種々の治療法が試みられてきたが、傷害組織の治癒を促進させるものではなかった。最近、高圧酸素療法(以下OHP)が本疾患の病態を改善する有力な治療法として注目されてきた。今回、われわれも骨盤部照射後の放射線膀胱炎にOHPを施行し、症状の改善を見た1例を経験したので報告する。

【症例】65歳、女性。1984年9月から11月にかけて腔癌に対し、46Gyの骨盤部に対する外照射と40GyのCsによる腔内照射を受けた。治療中から治療後1～2年にかけて軽い膀胱刺激症状があったが血尿はなかった。1985年から肉眼的血尿を見るようになり、安静、止血剤の投与、経尿道的電気凝固術などで対処されたが、再発を繰り返していた。肉眼的血尿は消失していたが1992年3月、根治目的でOHPが試みられることになった。OHPは純酸素吸入下に、2 ATAで1日1回70分間を計40回施行した。膀胱鏡では著明な変化は見られなかった。しかし、治療開始時に認められた顕微鏡的血尿がOHP28回終了時に消失した。また萎縮膀胱による頻尿感も軽減した。なお、気圧性外傷、酸素中毒などのOHPの副作用、癌の再発などはなかった。

【考察】放射線膀胱炎の病態は閉塞性動脈内膜炎による組織の虚血と低酸素症および2次性の感染であるという。OHPが本症に有効な理由ははっきりしないが、虚血に陥った組織の酸素分圧を高め、治癒機転が促進するということが推測されている。今回の症例の他、OHPの本症への有効性を示唆する報告はいくつかあるが、今後更なる臨床的検証が期待される。